

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K04829

研究課題名(和文) 前近代日本における住宅の寿命の実態ならびに寿命をめぐる住宅観に関する研究

研究課題名(英文) A study on the lifespan of houses and the view of housing in pre-modern Japan

研究代表者

藤田 勝也 (FUJITA, Masaya)

関西大学・環境都市工学部・教授

研究者番号：80202290

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：平安貴族の住まいの寿命(存続期間)ならびに、寿命をめぐる住宅観について、以下の研究成果を得た。

平安宮内裏の平均寿命は約6年。貴族邸では11～12世紀に平均約15～16年。10世紀に寿命50年超え、11世紀に100年超えの事例がある。しかし12世紀は最長でも50年程度である。鎌倉時代13世紀の京外では平均約8年程度だが、100年超の事例もある。ただし長寿命は御堂化・寺院化によるもの。貴族邸の短命化の主因は頻発する火災である。火難から免れない厳しい居住環境が、長寿命を期待しない諦観、永続性の放棄という住宅観を醸成した。裏打ちするのは旧宅ではなく新造宅の解体・移築である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

平安貴族住宅の寿命の実態が、本研究によってはじめて具体的に明らかになった。平均寿命は20年にも満たないが、平安宮内裏の約6年よりは長く、里内裏常態化の要因が寿命の差異にあることが示された。東三条第や花山院は平安貴族邸の代表例とされてきた。しかしきわめて長寿命の特異な存在であった。短命化の主因となった火災の頻発は、住宅を動産的に扱う住宅観を醸成した。現代の住宅観とは大きく異なる点である。

研究成果の概要(英文)： This research aims to understand the lifespan of court-nobles' residences during the Heian period. The outline of this paper's findings are as follows.

The average lifespan of the aristocratic residences in the 10th century was about 14 years. However, the average value was about 11 years, excluding the prominently long `Kan-in` with a lifespan of 52 years. The average lifespan of aristocratic residences in the 11th century was about 20 years. Excluding the two long-lived cases `Kazan-in` and `Tousanjo-dai`, the average value was about 15 years, and that of the 12th century was about 16 years. The difference is only one year. During this period, the average life expectancy can be considered to have remained almost unchanged. As above, the aristocratic residences were short-lived. The main factor was the fire. The harsh living environment that never escaped from the fire did not expect longevity from the house, and resulted in a kind of resignation and abandonment of permanence.

研究分野：建築史

キーワード：住宅 寿命 前近代 住宅観

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

住宅史研究とりわけ支配者層の住宅に関する研究は長い伝統をもち、成果は豊かに蓄積されてきた。しかし、近世の故実研究がそうであったように、建物平面の復元を主要な目的とした個別の住宅の実態解明に主眼がおかれ、それを前提に時系列的検討を加え、さらに寝殿造や書院造といった様式概念との整合性を検証する、というのがこれまでの分析の主流であった。そうした考察の過程で重視されたのは、住宅の竣工年次や所在地、敷地内の建物配置と建物構成、建物平面そして、住宅の居住者(所有者)である。それらが現存するたとえば国宝・重要文化財建造物の基礎データとよく符合するのは、偶然ではない。過去であれ現在であれ、どのような建築が存在した(する)のかという、建築のいわゆる「カタログデータ」を重視する点において、両者は価値観を共有するからである。ここに決定的に欠落しているのは、竣工後、時間経過の中で建築がどのように変化し、終焉したのか、という時間軸の視点である。たとえば平安貴族住宅には、120年近くにわたって継続使用された邸がある一方、1年を経ずに解体、移築、転用された邸もある。両者の寿命には大きな懸隔があり、その差異は住宅の本質に深く関わるはずである。しかし「カタログデータ」から、それをうかがい知ることは困難であり、そのような差異にこれまで注目されることはほとんどなかった。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、前近代日本における建築の寿命すなわち竣工から終焉までの存続期間とその内実の解明にある。とくに支配者層の住宅として古代に初発する公家の住宅、中世以降にあらわれる武家の住宅に焦点をあて、寿命の実態を詳細に明らかにする。課題の一つは、住宅の存続期間と終焉の要因ならびに、時代的傾向の全体像を明らかにすること。二つ目は、寿命に差異をもたらす修理や改修の履歴、それを反映する個々の住宅に特有の性格を解明し、さらに寿命をめぐる住宅観を読み解くことである。木造建築であることの物理的要因に加え、住宅の文化性、社会性を投影する寿命という、これまでの様式史とは異なる視点から前近代の住宅を見直し、その実態を明らかにすることによって、寺社の建築などとは異なるとされる建築類型としての住宅のあり方を見だし、もって日本住宅史を再構築するための基礎的知見の獲得を目指す。

### 3. 研究の方法

本研究では、前近代における支配者層の住宅の寿命について、第一に、住宅の存続期間と終焉の要因ならびに、その時代的傾向の全体像を把握につとめた。第二に、寿命の差異の背景・要因、寿命にもとづく個々の住宅に特有の性格の解明、寿命に関する言説の収集と解説といった分析作業を行った。それらの作業について3年間という短期間で集中的に取り組み、研究成果の蓄積を目指した。

初年度は、平安京における貴族住宅の寿命に関するデータ収集を行った。平安・鎌倉時代については寝殿造をめぐる住宅史研究のほか、おもに平安時代史あるいは国文学からの貴族住宅に関する個別研究があり、また中世の住宅とくに鎌倉時代後半については既往研究の蓄積がある。竣工・移徙や終焉の年次、また終焉の要因等についても、関連史料がすでに博搜・抽出されている場合がある。まずはそれらのデータの再確認・再整理の作業に着手した。ただし既往研究では、竣工・移徙や終焉の年次が不明確な場合もあり、また寿命に注目した研究ではないため、史料の脱漏も想定された。既往研究では不足する、個別住宅の寿命に関する史料の博搜と抽出が必要となった。

2年目以降も、引き続き貴族住宅に関する既往研究の精査と、関連史料の調査・収集をさらに継続、深化させた。これまで研究の空白期であった室町時代の貴族住宅については、応募者の科研費(課題番号:15K06413)による研究成果があり、これを基礎に史料の再整理と検証を行い、古代・中世の貴族住宅の寿命について、全体像の把握を目指した。

最終年度も引き続き関連史料の調査・収集をさらに継続、深化させた。とくに武家・寺家の住宅の寿命についての史料収集と分析につとめた。それらの住宅のうち、室町時代の足利將軍御所については、川上貢による既往研究が本研究にきわめて有益な情報を提供してくれる(川上2002年)。しかし鎌倉時代や室町後半の実態については体系的な研究がなされておらず、関連史料の収集作業が不可欠であった。さらに各時代の寿命に対する住宅観を示す史料を収集・分析し、近現代との比較検討を行うとともに、解体・移築にともなう住宅以外への用途の転化に注目することで、住宅としての建築の特質について論じた。

なお、研究期間の全体を通して、公刊史料の博搜と整理、分析が中心の作業となるが、とくに近世以降については、未公開の文書など新たな関係史料の探索を必須の作業として想定していた。しかしコロナ禍により十分に実施できなかった面があり、今後さらに継続して実施する予定である(科研費2022年度～課題番号:22K04527)。

#### 4. 研究成果

平安京における貴族の住まいの寿命(存続期間)ならびに、寿命をめぐる住宅観について、以下の研究成果を得た。

(1)天皇の住まいである内裏の存続年数について平安宮内裏、中世の準内裏、近世内裏を対象に検証した。平安宮内裏は、10世紀中期を境に著しく短命化し、その後の内裏の平均寿命は10世紀8.5年、11世紀5.2年と低下、期間を通して6.3年であった。いっぽう中世以降の準内裏は約30年、近世内裏は前半約17年、後半約52年であった。かように内裏では古代における短命が顕著であった。

(2)貴族邸の寿命について、平均寿命をもとに時代傾向を明らかにした。

9世紀は、寿命が判明するのが冷泉院・朱雀院・淳和院など後院に限られ、いずれも50年を超えて、平均値は約60年であった。

10世紀は、判明する事例数が都合13件で、寿命の平均値は約14年(13.95)であった。ただし寿命52年という他に突出して長い閑院を除くと平均値は約11年(10.78)であった。いっぽうわずか4ヶ月あまりという二条第南家をさらに除外しても、平均値は約12年(11.73)となる。ひるがえって10世紀の後院である冷泉院の寿命は16年で、9世紀の後院と比較すると短命だが、10世紀としてはほぼ平均的ともいえる。

11世紀は全事例45件で、平均値は約20年(20.04)であった。花山院と東三条第という長寿命の2事例を除外した43件の平均値は、約15年(15.09年)であった。10世紀の平均値約12~14年は事例数が少なく参考値にとどまるが、11世紀の平均約15年はこれよりやや長い程度で大差なく、10世紀から11世紀にかけて、寿命は一部例外を除けば、ほぼ変化なしとみなせる。

11世紀では、「平安盛期を代表する邸宅」として「精選」されるのが、藤原道長の土御門第ならびに、頼通の高陽院であり、「平安全期を通じて最も豪華な邸宅」、「優れて華麗なもの」と評される(太田1987年、pp307)。しかし各々の寿命は土御門第「13年」、高陽院「14年」である。住宅としての内実はともかく、寿命という視点からみると、いずれも当時のいたって平均的な屋敷だったことになる。

12世紀は、最長で50年に想定される六条中院も含めて、都合45件の寿命の平均値約16年(16.44)であった。11世紀の平均値約15年との差はわずか1年にすぎない。この間、平均寿命はほぼ変化なく推移したとみなせる。

平安宮内裏では10世紀後半以降、寿命は著しく低下し、11世紀はさらに低下、期間を通して平均値6.3年であった。貴族邸も10世紀を境に短命化した可能性がある。10世紀貴族邸の平均寿命は参考値ながら11~14年で、9世紀のそれより短いと推定された。それでもなお平安宮内裏に比べれば倍近く長い。つづく11~12世紀は約15~16年で、これに一部例外的に長寿命の屋敷が存在する、という状況であった。要するに貴族邸の方が内裏より寿命は長かった。頻発する火災を契機に、平安宮内裏から上級貴族邸へと皇居はうつり、時代とともにその頻度を増す。さらに当初から皇居として計画・造営した準内裏の登場へといたる。その要因に内裏と貴族邸の寿命の違いがあったことが推定された。

13世紀は、京内では12世紀までの傾向がほぼそのまま続き、京外ではむしろそれより短く平均して約8年という屋敷も一定程度存在した。しかし京外では100年をも上回るような長寿命の事例があった。ただしそれらは御堂をともしなう御所施設で、後に寺院化するものもあった。100年超の長寿命の住宅は11世紀に複数見られ、12世紀は不在で、13世紀には再び京外の御堂御所としてあらわれたことになる。

平安京内の住宅は短命というのが、一貫したトレンドであった。しかし13世紀京外の御堂御所では寿命が長い。あるいはそのことが京域外縁部における市街化の進展に寄与した可能性がある。寿命が判明する事例数は限られるが、12世紀に長寿命の事例は確認できず、11世紀鳥羽殿は73年で長寿命だが京外である。総じて11世紀における京内の花山院と東三条第は例外的かつ異質の存在であったことを確認した。

上記検証した時代傾向が妥当性をもつことを、源俊房の土御門亭、法住寺北殿、中御門宗忠の五条烏丸第、二條東洞院殿をめぐる「新造」「破損箇所無し」「多年」といった言説から明らかにした。

(3)当時の平均寿命に満たない短命な住宅事例について検証し、短命化の主因であった火災の実態を具体的に明らかにした。

とくに短命な住宅事例についてその終焉をみると、多くが火難によるものであった。取り上げた住宅は時代順に次の7例である。内大臣藤原伊周の二条第(寿命4ヶ月)、大炊御門東殿(2年および9ヶ月、2年間に2度焼失)、六角東洞院第(竣工後、実質的な正式移徙予定の1ヶ月前に焼失、竣工後4ヶ月)、三條北烏丸西殿(新造から3ヶ月、移徙から2ヶ月と20日後)、後鳥羽院御所の二条東洞院殿(約5年および1ヶ月)、鎌倉初期の中御門京極殿(居住年数は5ヶ月、その後荒廃まで8ヶ月)、鎌倉後半の院御所大炊御門万里小路殿(8ヶ月)。

住宅火災の頻発を象徴する事象として、つぎの3点について論じた。第一に、竣工後移徙前の焼失や、作事中の火災で、実質的に寿命の時を刻むことすらなかった住宅事例の存在(東三条第、高松殿)、第二に、同一屋敷における火災の頻発(二條東洞院殿、九条第)、第三に、火難に

よる短命についてもはや言及「しない」こと（顕季の高松第、春日殿）である。

（４）短命という現実から形成される住宅観について、築浅物件の移築をもとに明らかにした。平均寿命には達していない真新しい住宅、むしろ達していないからこそ解体・移築されたのではないかとも考えられる住宅事例として、大炊殿、冷泉院、閑院、五辻殿を取り上げた。火難から決して免れないという厳しい居住環境が醸成するのは、長寿命を住まいに期待しないという、ある種の諦観であり、永続性の放棄であった。実際、解体・移築されるのは、竣工間もない新しい住宅であった。真新しい建物でも解体・移築して使える時に使えば良い、というような、本来は不動産であるはずの住宅を動産的にみなし扱う。寿命をめぐって、むしろ前向きな住宅観をそれは反映するものであった。

（５）平安貴族の住まいの平均寿命に鑑みて、突出して寿命が長い屋敷が11世紀に始発する。東三条第と花山院で、前者は寿命123年、後者はそれ以上存続した。この2邸が他に抜きん出て長寿命だった理由はなにか。その背景・要因について推論した。

東三条第については、保元の乱以降、儀式専用会場から他邸と同じように居住実態をとまなう「住宅」へと変化したことがあるのではないかと推察した。

東三条第より長寿命であった花山院については、花山院家での大饗など儀式開催の会場となっている点では東三条第と共通するものの、花山院家の当主の住まい、「住宅」として用いられており、儀式専用会場だったわけではなかったことを確認した。したがって長寿命の要因・背景を東三条第と同様に推論することはできず、長寿命の理由については今後究明すべき課題としてのこされた。

#### < 主要参考文献 >

高群逸枝 『平安鎌倉室町家族の研究』 国書刊行会、1985年

太田静六 『寝殿造の研究』 吉川弘文館、1987年

角田文衛総監修、古代学協会・古代学研究所編 『平安京提要』 角川書店、1994年

川上貢 『日本中世住宅の研究 [新訂]』 中央公論美術出版、2002年

藤田勝也 『平安貴族の住まい』 吉川弘文館、2021年

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 藤田 勝也	4. 巻 154
2. 論文標題 平安貴族の住まいはなぜのこっていないのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 本郷	6. 最初と最後の頁 2-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 劉羽虹・藤田勝也	4. 巻 86-783
2. 論文標題 貴族日記にみえる平安・鎌倉時代貴族住宅の末尾語「亭」について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 1550-1558
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤田勝也
2. 発表標題 「某寝殿図」について
3. 学会等名 日本建築学会近畿支部研究発表会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 藤田勝也	4. 発行年 2021年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 227
3. 書名 平安貴族の住まい 寝殿造から読み直す日本住宅史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

関西大学建築史研究室のWebサイト「works」  
<http://www.arch.kansai-u.ac.jp/HISTORY/works.html>  
令和3年10月～令和4年3月、京都御苑「閑院宮邸跡収納展示館」の展示リニューアル（環境省自然環境局京都御苑管理事務所、令和4年（2022）4月オープン）の公家町VRおよびパネル展示について監修・協力を行った。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------